

多角的視点を促す平和教育の実践

ー 全地球 VR 教材及びビデオ通話アプリケーションの活用 ー

内田 武志 (10113013)

1. はじめに

日米における、原爆投下に関する認識の差が問題視されている(手塚 2012)。また、伊ヶ崎 (1996) は日本の原爆認識に対して、被害面の教育だけでなく、加害面の教育も必要だと述べた。つまり、次世代の平和教育として、加害面と被害面の視点から学ぶ必要性について問われている。したがって、学習者が多角的な視点から思考を深めていく平和教育の在り方について検討の余地があると言えよう。

そこで、本研究では「全地球 VR 教材」、「ビデオ通話アプリケーションを用いた真珠湾からの中継」、「ラオス学生との異文化交流」を取り入れた平和教育を実践した。さらに、多角的視点を促すことの意義について、本実践を通して検討することを目的とした。

2. 全地球 VR 教材の開発方法

図 1 に全地球 VR 教材の概要を示す。本研究の開発では、学習者が容易に被爆地長崎の様子を把握できるようにすべく、瀬戸崎ら (2015) が開発した教材の機能を拡張した。拡張した機能は、コンテンツの追加、音声解説の追加、文字解説の追加であった。また、本教材を iOS 用アプリケーションとして再構成し、ローカル環境 (タブレット端末内) での使用を可能にした。さらに、異文化交流で活用すべく、本教材の英語版を開発した。なお、開発には、AR 環境統合ソフトウェア (metaio creator / meatio 社製) 及び ゲーム開発ソフト (Unity5.3.1 / Unity Technologies 社製) を使用した。

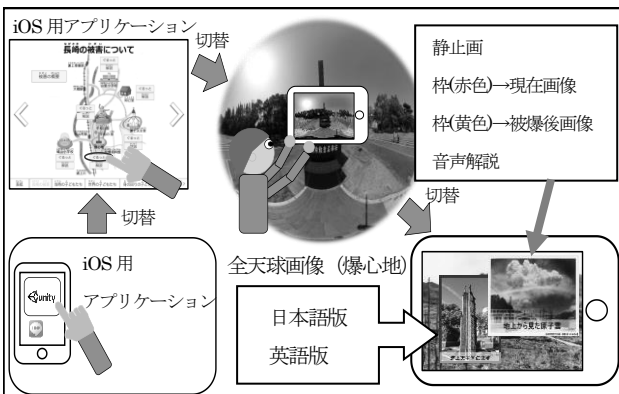


図 1 全地球 VR 教材の概要

3. 実践・評価方法

本研究は、日本学生 (19 名 : 大学生 16 名・大学院生 3 名) とラオス学生 (24 名 : 高校生 12 名・大学生 11 名・大学院生 1 名) を対象に、平和教育を実践した。授業は「ラオス学生による自国紹介」、「自己紹介 (グループ内)」、「真珠湾との中継」、「全地球 VR 教材を用いた被爆地長崎の学習」、「異文化交流議論」、「発表 (全体共有)」の手順で行った。また、授業中に学習者が記入したワークシートでは、日本学生とラオス学生の真

珠湾攻撃・原子爆弾・平和に関する認識について自由記述による回答を得た。さらに、日本学生から授業後に本実践の感想を得た。なお、自由記述による回答と感想は、カテゴリ別に分類し、集計した。

4. 結果・考察

表 1 に参加者の認識における、特徴的な回答を示す。結果から、日本学生とラオス学生との間には真珠湾攻撃・原子爆弾・平和に対する認識の違いがあった。したがって、日本学生とラオス学生における異質性が確認された。

表 2 に感想の集計結果を示す (有効回答 : 17 名)。結果から、多くの参加者が本実践に高い満足感を示した。異質性が存在する中での異文化交流は、文化的他者の価値観に気づく要因になり得た。したがって、「異なる価値観」や、「異質性の中に含まれる同じ価値観」を認識させたことが、学習者の深い思考への到達に寄与し得た点で、多角的視点を促すことの意義が示されたと言えよう。一方、授業改善について「時間不足」や、「学生の戸惑い」が挙げられた。したがって、本実践から得られた知見を基にした授業デザインの検討が必要である。

表 1 各国学生の認識の違い

	日本学生 特徴的回答	数	ラオス学生 特徴的回答	数
真珠湾攻撃	加害への否認	14	被害への言及	12
原子爆弾	情意的感情移入	11	原子爆弾に対する言及	30
平和	笑顔	6	争いがないこと	18

表 2 感想の集計結果

異文化交流体験		数
授業実践の価値	・意義のあるものであった ・大変貴重な経験であった	20
異なる価値観の認識	・考え方の違いがあった ・歴史的な認識の違いがあった	8
同じ価値観の認識	・同じ価値観があることを発見した ・平和に対する考え方は同じであった	7
授業実践の改善点		数
授業内容	・学生が戸惑いを感じていた ・もう少し時間があつたらいいなと思いました	5

5. まとめ

本研究では、日本学生とラオス学生を対象に多角的視点を促す平和教育を実践し、評価した。その結果、異なる視点を提供することが、学習者の深い思考への到達に寄与し得たことが示された。今後の課題は、授業デザインを検討するとともに、多角的視点を促す平和教育を模索していくことである。

参考文献

手塚千鶴子 (2002) 日米の原爆認識—「沈黙」の視点からの考察—異文化コミュニケーション研究, 14 号 79-97
(指導教員 瀬戸崎 典夫 : 初等教育講座)